

● シリーズ 私の見た日本 Vol.229

家と都市の文化散歩

張 力文 (チョウ リキブン)

1998年生まれ。2020年青島理工大学卒業、2023年日本大学大学院芸術学研究科 若原研究室所属 在学中



記憶の中の田字窓と高層ビル群

私の幼少期を一枚の絵で描くとしたら、それは窓の外に広がる田園風景でしょう。当時、祖母の家は小さな村にあり、低い屋根の家々が点在していました。庭には木々の影が日差しのなかで揺れ、子供たちは石のテーブルから小川へと走り回り、犬が後を追いかけていました。庭の外には一面のトウモロコシ畑が広がり、秋になると黄金色に包まれていました。家の窓は正方形の田字型で、その窓を通して、私は初めて「家」というものを意識しました。私にとって家とは、庭の果樹、台所で忙しく働く母の姿、隣の子供たちが突然叩くドアの音、大人たちが集まって話す私には理解できない会話。そうしたものが織り成す開放的で、人と人をつなぐ空間でした。

しかし、私が成長するにつれて、このような生活は徐々に姿を消していきました。村にはクレーンや工場の音が鳴り響き、畑は整地されて整然とした空き地に変わり、そこに高層ビルが建ち並ぶようになりました。私たちは集合住宅に引っ越し、家は広くなり、家具も現代的になりましたが、隣人とのつながりは薄れていきました。庭のある生活の温かさやいたる所にあつた賑やかさは、高層ビルの冷たい空間に取って代わられたように感じました。

子供の頃、テレビで見ていた日本のアニメは、私にとって「もう一つの家」を初めて知きっかけでした。アニメの中では、子供たちが街角の公園で遊び、住宅街の小道には郵便配達員が自転車で手紙を届け、小さな家が整然と並び、それぞれの家に小さな庭がついていました。こうした風景は、私の故郷で進行中の変化と鮮やかな対比となりました。当

時の私は、日本の人々がどのようにしてこんなに狭い場所で「家」を感じているのか、とても興味がありました。

初めての東京 密集の中の秩序と温もり

数年後、実際に東京の街に立ったとき、子供の頃アニメで見た風景が突然現実のものとなりました。東京は想像以上に「密集」していて、狭い道が続き、家々が肩を寄せ合い、バルコニーさえも隣り合わせになっていました。しかし、その「密集」の中に、私は不思議な温かさを感じました。

東京の街並みは、まるで複雑に絡み合った物語のようです。どの曲がり角にも、過去の記憶や新しい驚きが隠れているかもしれません。ある日、上野の小さな路地を歩いてい

ると、小さな神社を偶然見つけました。そこは静かで、まるで現実の世界から切り離されたかのような場所でした。赤い鳥居の隣には古い桜の木が数本あり、地面には落ち葉が積もっていました。時折通りかかるお年寄りが立ち止まり、頭を下げた祈りを捧げる姿も見かけました。その神社から数歩歩くと、ガラス張りの現代的なカフェがあり、中では客たちがくつろいでいる様子が見えました。このように新旧が交錯する景色が、東京の独特な魅力を私に感じさせました。東京は完全に近代化に飲み込まれることなく、伝統と現代が共存しているのです。

しかし、この「共存」は時に表面的な調和に過ぎないのかもしれない私は同時に感じました。高層ビルに囲まれた小さな神社は、そ

の存在が文化遺産としての展示物のように見え、もはや生活の一部ではなくなっているのではないかと、とも思いました。私たちが東京の寛容さを称賛する一方で、徐々に周縁化されていく伝統に目を向けることを忘れてはいないでしょうか。

街角の緑と生活の間隙

ある小さな家の前には、満開のバラが二鉢並べられ、家主が丁寧に枝を剪定していました。その花と家の前の狭い通路が一体となり、「空間の感覚」に対する私の新たな理解を生み出しました。

これらのささやかな光景は、東京の日常の一部であるだけでなく、日本人の生活の細部に対するこだわりを反映しています。限られた空間の中でも、自然とのつながりを持つための小さな場所を残すことを惜しみません。このような生活から生まれる設計や配置は、街並みに温もりを与えるだけでなく、生活そのものにも味わいを持たせているのです。

東京の家

小さくても精巧、それとも無奈の選択?

私は東京の住宅設計に対して深い敬意を感じています。この都市では、家は大きくなくてもよく、限られた面積から無限の可能性を生み出しています。しかし、「小ささ」は、同時に経済的な現実を強く意識させるものでした。多くの住民にとって、この「小ささ」は選

択ではなく、仕方のない妥協です。高額な土地の価格、緻密な都市計画——これらによって、多くの人々が狭い生活空間に適應せざるを得なくなっています。特に、低所得層が住む遠方の地域では、まったく別の光景が広がっています。古びた建物、薄暗い光、狭苦しい部屋、そして個人のための独立した空間さえない。東京の「小ささ」は文化の一部であり、同時に資源分配の不平等の結果でもあるのかもしれない。

家の未来 伝統と現代はいかに共存するか

中国でも日本でも、近代化が「家」の意味を再定義しています。家の本質は、物理的な空間にとどまりません。それは人々の感情や記憶、文化の拠り所です。未来の都市計画や住宅設計において、効率的な機能性を持ちながらも、生活の温もりと美しさを保つバランスを見つけることが必要でしょう。結局のところ、高層ビルが建ち並ぶ現代都市であろうと、記憶の中の田字窓であろうと、家が家である理由は、私たちのもっとも柔らかな感情と最も貴重な記憶を宿しているからです。

人々が「家」に求めるものは共通しています。どのような空間に住んでいようとも、人々とのつながり、自然への親しみ、温もりの追求——これらが家の根本的な存在意義です。東京の街角で丁寧に手入れされた花木、小さな路地にある静かな神社、そして住民たちが狭いバルコニーで育てる野菜。これらは私に、見た目には狭く窮屈な環境の中でも、生活の質と温もりが保たれていることを気づかせてくれました。

一方、中国の急速な都市化の中で、私たち

はこうした細やかな力を見落としているように感じます。人々は広い高層ビルに移り住み、現代的なマンションで生活していますが、生活の味わいが徐々に忘れ去られています。もしかすると、未来の都市開発は、日常生活の中で人々が環境とどう関わるかにもっと注目すべきかもしれません。ただ大規模な都市と効率的な居住機能を追求するのではなく。

伝統と現代は対立するものではありません。同じ空間の中でバランスを見つけることができます。東京の小さな神社たちは、高層ビルに囲まれていながらも歴史の温もりを放っています。狭い住宅でも、巧みな設計によって、住む人に「家」の温かさを感じさせることができます。これらの要素を通じて、私は深く理解しました。家は単なる住む場所ではなく、文化や感情、記憶が集う場所なのです。どれだけ未来の都市が現代化されようとも、「家」の概念は人と人とのつながりから切り離せません。私たちの自然への渴望や、生活の温もりに対する追求も同様です。これこそが「家」の本当の意味です。

私の幼少期を振り返ると、田字窓の下での生活は既に過去のものとなりましたが、それが私に与えた「家」に対する理解は深く心に根付いています。そして今、東京の街を歩くなかで、私はもう一つの「家」の可能性を見ました。それは、現代の都市の中で温かさや人情味を保ち続ける生活の在り方です。どこにいようとも、家の意味は変わりません。それは、私たちの心の避難所であり、記憶と感情を託す場所なのです。



日本の住宅地の家